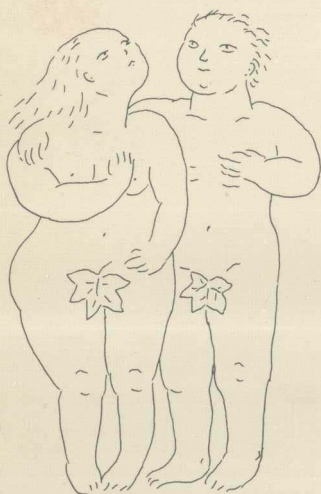


ちよつと寄り道

三木卓エッセイ集



ちよつと寄り道

三木卓エッセイ集

ちよっと寄り道

1979年 5月25日 第一刷

定 価 830 円
著 者 三 木 卓
発行者 堀 内 末 男

発行所 株式会社 集英社

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-10
電話 東京 03-230-6361 (出版部)
238-2781 (販売部)

印刷所 共同印刷株式会社

落丁、乱丁の本はお取り替えます

© 1979 T. MIKI
Printed in Japan
0095-772197-3041

ち
よ
つ
と
寄
り
道

PART 1 青春の道すじ

9		こどもの日の夢
10		わたしの日本鉄道
12		ひまわり
14		幼年期のこと
18		他人のしあわせ
20		引越し16回
22		恩師たち
27		アメリカ・アメリカ
29		父のしてくれた話
32		父の夢
35		乱世育ち
39		楽器と自転車
44		金銭について
50		十八歳

53	成人式のころ
56	わたしの二十代
58	呪縛の三十年
62	わが声、他者の声
70	時は過ぎて

PART 2 読んだり聞いたり

75	文字
77	肉体で読む
80	わたしと文庫本
83	本の中のこどもたち
87	おもしろい小説の条件
92	『風に吹かれて』の若者たち
98	同い年の姐御
101	金子さんのこと
104	夢二の詩

114 生の感動

118 アンデルセン雑感

122 ドストエフスキー再読

128 はじめてホームズを読んだ頃

132 闇を持つ人

137 マンガの不死性

140 男の歌・女の聴き手

143 私にとつてのビートルズ

146 ポータブル・ラジオの戦後

148 ジャズをおそれる

PART 3 部屋窓から

157 わたしの夢

160 ねむる

163 人とかかわる

170 応援について

174上品？ 下品？

177わが武器は地下大金庫にあり

181時というもの

188ゼイタク論

194変わる

196風邪をひく

199引越し一カ月

201家主について

205小銭を使いたい気持

210好き嫌い

213海の味 陸の味

218男が結婚に求めるもの

227ひらかれた視野で

あとがき

初出一覧

装丁 佐野洋子

PART 1 青春の道すじ

こどもの日の夢

病弱だ、ということもあって、放心癖のある子だった。

よく「ぼんやりしてる」といわれて我に返った。手を動かしたりからだを動かしたりして何かやっているうちに、いつしか手がとまってしまう。思いついたことが、次から次へと空想を織り出していく。わたしにとってはそれは現実のつづきなのだった。我に返ったとき、それが空想だと気づいて悲しかった。

夢を見るのはおそろしかった。

とくに微熱のあるようなとき、夢はきまってわるい方へ展開した。画面は黄色に輝いていて、さわったものの手ざわりは鳥肌が立つほど気味わるかった。目ざめて、自分が闇のなかに一人でいるのに気づくと、ほっとするとともに、母親に来てもらいたくて烈しく泣いた。目覚めたときはおそろしいので、今度はいい夢を見ようと思った。しかし、ねむりこむとたちまち黄色の画面があらわれ、事態

は一挙に悪くなるのだった。

でも、いい夢もあった。くり返しくり返し見たすばらしい夢は、大連の家の前に林檎の木が一本生えていて、その木に、赤く熟した林檎の実がひとつ、なっている、というものだった。その林檎の美しさは忘れられない。木に果実がみえる、ということのすばらしさをあますところなく体现して、夢の闇のなかでつややかに輝きつづけていたのであった。

わたしの日本鉄道

満州育ちだから日本の記憶はぜんぜんなかった。日本の鉄道のこととも知らなかった。国鉄についてのもっと古い記憶は、持っていたおもちゃの電車で「山手」という札が前にさがっていた。おふくろはそれを「へやまのて」と呼び、「へしようせんでんしゃ」といった。わたしはそのせいか今でも省線という言葉を使うが、そのときは山手線のことを思いうかべている。わたしの省線電車は豆電球のソケットがむき出しになったまま、大連市の坂をいたりきたりした。

次の鉄道の記憶は映画である。畳のしいてある細長い部屋に人々が坐っている。これが客車なのである。戸があいて、帯刀した若い侍が「ごめん」とはいってきて、

「……どのはおらぬか」と女を探している。女はいない。次の車両にうつる。また畳のしいてある細長い部屋に人々が坐っている。

「……どのはおらぬか」若侍がいう。幾度か繰り返してから仲間の男と仁王立ちになって顔を見合わせて「おらぬ」という。車両の響きに合わせて彼等も揺れている。

帯刀している侍が汽車に乗ってくる、というのは時代が合わないから記憶ちがいらしくどうもおかしいが、これはなんとという映画だったのだろう。今でも交通博物館へ行つて、古い客車など見ると、この映画のことを思い出す。

もう一つはやはり映画で、「C 57」という当時評判だった文化映画だった。流れる風景が流麗だったこと、炉の中がテントウムシの翅のように左右に開き、中の白熱状態が見えるのが印象的だった。特急のつばめには憧れた。交通博物館で三等車の対向面のない特徴的な座席を見たとき、一度乗ってみたかったな、と思った。

引揚げて来たとき夢も幻想も全部ふっとんだ。女の人がおしっこにも行けないスジズメ列車で、窓から人が乗ってくるのには驚いた。印象が強烈だったので、入学した学校でその汽車の旅を作文に書いたら、美人の先生がほめてくれた。文章を書くのがおもしろいと思つたのはその時で、わたしがこんな職業になつてゐるのはそのせいかもしれない。

ひまわり

ひまわりの存在に気づいたのは一九四〇年ごろ、五歳で場所は満州大連の庭である。

庭といっても一軒の家を所有していたわけではない。鉄筋コンクリート四階建てのアパートの一階を借りていたのである。八・六の2Kで、今でいう（専用庭）が一階居住者の特権でついていた。日あたりがわるくて、掘りかえずと赤土が出て来た。猫のひたいほどのものである。

父母はこの庭にナスとジャガイモ、トマトをつくり、若干の草花もあった。しかし、今のわたしには、ここではじめて知ったナスやジャガイモの草の部分や花の部分が印象深く思い出される。

ひまわりは、その庭の片隅に数本、かたまつて生えていた。

心のなかによみがえってくるそのひまわりは、幼いわたしの背丈の倍以上もあり、茎の太さは、腕に近い。日あたりのわるい庭は、今も日がかげっていて青く暗い。しかしひまわりの花はちがう。となりのお屋敷ごしにななめにはいつてくる光は、ひまわりの花には当るのである。黄金いろに輝く大

輪の花。その茎や根は青い光のなかにうまっているけれども、その花は、もう充分に熟して、円盤は外側にそりかえっている。

ひまわりは、太陽の方向に花をむけてついてまわる。そういった女の子がいた。ほんとうにそうなのだろうか？ たしかめてみはしなかったけれども、そのことがひまわりの神秘を増した。そう思ってみると、あの円盤が小さな花ひとつひとつで埋められていて、ひとつの大きな花になっているのも、不思議な気がした。

ひまわりには食用可能なものがあるのも、ひきつけられることだった。食用ひまわりの種子には白地に黒の縦縞があつて、とても大きい。充分に熟した円盤を指を櫛にしてひつかくとひろげた布の上にばらばらとこぼれおちる。

満州ではひまわりの種子を売っていた。あれは炒つてあつたのだろうか、どうだろうかよくわからない。大きな箱にいっぱい入れ、中にコップが入れてある。そのコップに入れてはかり、紙の袋に入れてくれる。

種子は歯のあいだにはさんでパリンと割る。するとなかから油の多い中身がぼろっとでてくる。かみしめると特有のにおいがして味がある。

しかし残念なことはその一粒がとても小さいので、おいしさが口のなかにひろがったぐらいでおしまいになってしまう。そこでもう一粒、また一粒。いくらたてつづけに食べても欲求不満である。

都会ぐらしが続いて、ひまわりを見ない夏が続く。

幼年期のこと

わたしの幼年期の記憶は、不安と苦痛にあらかた支配されていて、ふつうの人間と多少ちがうのではないかと思う。わたしは三人兄弟の末っ子であるが、この兄弟はひどく病気に好かれていて、何時も病気の二重唱か三重唱をやって親をおびやかしていた。三人兄弟のなかでもっとも秀れていた子は長男であって、かれは病気に愛されすぎて、とうとう七歳であの世へ行ってしまった。次に残った兄も相当に好かれ、今でも胸部レントゲンの像を医師が見ると「ほう」と感嘆の声をあげるほどあららしい爪跡を残しているが、虎口を脱してからというものの、大そう元気である。

病気の数では、三人のうちでわたしがチャンピオンだ。いろんなのがやってきて、さんざん味見をしたあげく「こいつはどうしようもねえ」といってほうり出したために生きられたのがこのわたしである。もっとも、ほうり出されたとき、左足はイカれてしまったけれども。

今ふりかえて当時の記憶を反芻してみると、肉体的苦痛の感覚は案外希薄になっている。母親に